

「わたしについて来なさい」

マルコの福音書 1:16～18

はじめに

イエシュアはその宣教の働きの初めに、弟子を探し求められました。今日はその最初の二人である、シモンとその兄弟アンデレについて見ることとなります。彼らは田舎の平凡な漁師でした。聖書についての知識も殆どなかったと考えられます。そんな彼らになぜイエシュアは目を留められたのでしょうか。なぜ彼らだったのでしょうか。神のなさることに偶然やたまたまはありません。すべてが必然で意味があり、重要なメッセージを持っています。つまり神の御心において、絶対に彼らでなければならぬ理由があるのです。そしてイエシュアはその神の御心とまったく一つである御方です。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 10:30 わたしと父とは一つです。

ですからイエシュアの思考、言動、行動、出会う人、行く場所、そして目に留まるものにいたるまで、すべて神の御心のままです。今日は「わたしについて来なさい」と言われたイエシュアの御言葉がタイトルになっていますが、誰よりイエシュアご自身が、御父である神の御心に徹底的について行く、完全に従い通した御方です。ですからイエシュアについて記されていることのすべてが一つも違わず神の御心を反映しているということです。そのような視点を持ちながら、今日の内容に入っていきます。

1. 漁師

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:16 イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。

イエシュアはガリラヤ湖のほとりに行かれました。それは漁師であるシモンとアンデレに目を留めるためです。漁師のことをヘブル語でダツヤグ(דָּוֶן)と言い、「魚を取る」という意味の動詞ディーグ(דָּוֶן)の派生語です。このディーグは旧約聖書で一箇所しか使われていません。

【新改訳 2017】

エレミヤ書

16:15 ただ『イスラエルの子らを、北の地から、彼らが散らされたすべての地方から上らせた【主】は生きておられる』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。

16:16 見よ。わたしは多くの漁夫を遣わして——【主】のことば——彼らを捕まえさせる。それから、わたしは多くの狩人を遣わして、あらゆる山、あらゆる丘、岩の割れ目から彼らを捕らえさせる。

これは世界中に離散しているイスラエルの子らを、神が再び集めるという約束の預言です。ここで「彼らを『捕まえさせる』と訳されているのが聖書でただ一つのディーグで、「漁夫」と訳されているのは

ダツヤークです。イエシュアが漁師に目を留められた理由は、この預言を指し示すためだと考えられます。つまりイエシュアはイスラエルの子孫たちを再び集めるという使命を帯びているということです。そしてその目的は、イスラエルの子らにイエシュアが「わたしが主であること」を知らせるためだと後述されています。

【新改訳 2017】

エレミヤ書

16:21 「それゆえ、見よ、わたしは彼らに知らせる。今度こそ彼らに、わたしの手、わたしの力を知らせる。そのとき彼らは、わたしの名が【主】であることを知る。」

この世の終わりに、イエシュアは再びこの地上に降りて来られ、「イスラエルの子ら」を世界中から集められます。その御計画がこのディーク、「魚をとる」者である「漁師」をイエシュアが「ご覧になった」目を留められたことが指し示す意味だと考えられます。

2. シモンとシモンの兄弟

①シモン

そしてイエシュアは当時ガリラヤ湖で漁をしていた数ある漁師たちの中からまず「シモンとシモンの兄弟アンデレ」を選ばれました。シモンはヘブル語ではシムオン(שמעון)と言い、ここに「聞く」という意味の動詞シャーマ(שמע)という言葉を見つけることができます。そしてこのシャーマの最初の言及、その本来の意味が創世記 3:8 に表されています。

【新改訳 2017】

創世記

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

これはエデンの園で罪を犯したアダムとエバが、神の御顔を避けて隠れる場面ですが、ここで「主が園を歩き回られる音を『聞いた』」という部分に最初のシャーマが使われています。「歩き回られる音」とは意識で、直訳では単純に「歩く音」または「歩く声」です。「歩く」とは必ず出発点があり、そこから戻るにせよ進むにせよある到着点に向かって行くことを意味します。ですからこれは神である主が何を始められ、何を目的としておられるのかという声、すなわち神の御計画についての御言葉を「聞く」ということが本来のシャーマの持つ意味だと考えることができます。つまりイエシュアがシモン、シムオンに目を留められたという事実の中に、イエシュアが御父である神の「歩く声」神の御計画を「聞き」、そして神とともに「歩く」御方であることが指し示されていると考えられます。

②アンデレ

またイエシュアはシモンの兄弟アンデレにも目を留められました。アンデレ(אנדריא)という名前の中にはナードル(נדור)「誓う」という意味の動詞を見つけることができ、「私は誓う」という意味に捉えることができます。この最初の言及も見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが、両親のもとを離れ、遠い異邦の地を目指す旅の途上の出来事ですが、ルズ(לז)「曲がった、ひねくれた」という意味の場所で一夜を過ごしたヤコブは、そこで夢を見ます。天から地に伸ばされたはしごを御使いたちが上り下りするという何とも不思議な夢です。そこで主は彼にこう語られました。

【新改訳 2017】

創世記

28:13 「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

夢から覚めたヤコブは、自分が枕にして寝ていた石に油を注ぎ、その場所をベテル(בֵּית־אֵל)「神の家」と呼びました。そしてそこで彼は「誓願を立てた。」とあります。これが聖書で最初のナーダルです。そしてその誓願の内容とは、ヤコブすなわちイスラエルが父の家に帰る時、油注がれた「この石」は神の家となる、というものでした。以前、ヘブル語で「石」はエヴェン(אֶבֶן)と言い、アーヴ(אָב)「御父」とベーン(בֵּן)「御子」という言葉が合わさったものであると考えられ、御父の御子であるイエシュアを指し示している言葉であると述べました。ですから「誓願を立てる」ナーダルとは本来、御父である神の御子イエシュアが、イスラエルを父の家すなわちアブラハム、イサクに約束された地に帰らせ、そこにベテル「神の家、神の国、御国」を建てるという意味が表されていると考えられます。

以上、1:16 でイエシュアが目を留められた三つの存在の指し示す意味をまとめるとこのようになります。

名称	語源	最初の言及	
漁師	ディーグ(גִּי)「魚を取る」	エレ 16:16	イスラエルの民を再び集める、彼らの主
シモン	シャーマ(שָׁמַע)「聞く」	創 3:8	神の御計画に聞き従って歩む
アンデレ	ナーダル(נָדַר)「誓う」	創 28:20	イスラエルの民を帰らせ、神の国を建てる

このように、イエシュアは目を留められる存在の中に、ご自身の存在と働き、目的を指し示しておられると考えられます。ちなみにイエシュアはこれらのものを「ご覧になった」とありますが、ここに使われているヘブル語ラーア(רָאָה)は、創世記 1:4 にその最初の言及があり、神が光と闇を分けられたことを指し示しています。

【新改訳 2017】

創世記

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

このように、「見られた」ラーアとは本来、神の目による神の視点を指し、その目に留まったもの「見られた」ものを「良し」とし、それを御自分のものとして区別する、選び分けることを意味していると考えられます。ですからイエシュアの視点とは御父である神のそれとまったく同じであり、神の御計画を指し示すものにのみ目を留められるということがこの「ご覧になった」ラーアという言葉に表されていると考えられます。そしてイエシュアは、神が目を留められた「漁師」である「シモン」と「シモンの兄弟アンデレ」に向かって声をかけられます。

3. ついて来なさい

1:17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」

この「ついて来なさい」と訳されているヘブル語はハーラフ(הָלַךְ)「歩く」という意味の動詞です。この最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

2:14 第三の川の名はティグリス。それはアッシユルの東を流れていた。

これはエデンの園から流れ出ている川についての言及です。ここで「流れていた」と訳されているのが聖書で最初に使われたハーラフです。「ティグリス」と訳されていますが、ヘブル語ではヒツデケル(חִצְדֵּקֶל)と記されています。この名前前の意味は今のところ不明です。しかし次の「アッシユルの東」はこのように解釈することができます。アッシユル(אַשּׁוּר)という名前の中に「見つめる」という意味の動詞シュール(שׁוּר)を見つけることができ「私は見つめる」という意味に捉えることができます。これは本来イスラエルの民を神の聖なる民として「神が見つめる」ことを意味した言葉です。

【新改訳 2017】

民数記

23:7 バラムは彼の詩のことばを口にして言った。「バラクは、アラムから、モアブの王は、東の山々から私を連れて来た。『来て、私のためにヤコブをのろえ。来て、イスラエルを責めよ』と。

23:8 私はどうして呪いをかけられるだろうか。神が呪いをかけない者に。私はどうして責めることができるだろうか。【主】が責めない者を。

23:9 岩山の頂から私はこれを見、丘の上から私はこれを見つめる。見よ、この民はひとり離れて住み、自分を国々と同じだと見なさない。

23:10 だれがヤコブのちりを数え、イスラエルの四分の一さえ数えられるだろうか。私が心の直ぐな人たちの死を遂げますように。私の最期が彼らと同じようになりますように。」

これはモアブの王バラクが、イスラエルの民を呪うために遣わした占い師バラムの言葉です。しかしバラムは神の介入によってこれを呪うことができず、神がお選びになった、神がシュール「見つめる」民として、呪うどころか逆にイスラエルを祝福してしまいます。このようにシュールとは本来、呪いから祝福へと変わるイスラエルの民を指し示す言葉であると言えます。これは究極的には、今日もなお迫害の歴史を辿るユダヤ人たちが、イエシュアが再臨される時に果たされる創世記 12 章の神とアブラハムとの間に交わされた

【新改訳 2017】

創世記

12:2 わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

という約束、契約の成就を指し示していると考えられ、イエシュアを王としイスラエルを中心とした世界統一国家「メシア王国、千年王国」の樹立を指し示していると考えられます。それが「アッシュル」の語源であるシュール「見つめる」という言葉が本来指し示しているものであると考えられます。

そして「アッシュルの東」の「東」は、キドゥマー(קִדְמוֹת)と言い、同じく「東」を意味するケデム(קֶדֶם)の派生語で、このケデムとは本来、エデンの園が置かれた場所を指し示しています。

【新改訳 2017】

創世記

2:8 神である【主】は東の方のエデンに園を設け、そこにご自分が形造った人を置かれた。

これらのことから「アッシュルの東」という言葉には、イスラエルの民を聖なる民とし、これをエデンの園に置く、というような意味合いがあると考えられ、これは神の御計画の完成を指し示す言葉であると言えます。そしてそこを「流れる」と訳されたハーラフという言葉を用いて「わたしについて来なさい」とイエシュアは言われたのです。ですからイエシュアについて行く、ともにハーラフ「歩む」とは

本来、このイスラエルの再建およびメシア王国、千年王国の樹立と、創世記に記されたエデンの園の回復を同義とする神の家、神の国の御計画に従うこと、まさに川の水がその川筋に沿って、流されるままに進むように、神の御計画に沿って歩む、従って生きることを意味していると考えられます。そして「シモンとシモンの兄弟アンデレ」に対してイエシュアは「人間をとる漁師」にするとおられます。

4. 人間をとる漁師

「人間をとる漁師」とは、先ほど「魚をとる」という意味の動詞ディーグについての言及で述べたエレミヤ書 16 章に記された、神に遣わされた「多くの漁夫」のことだと考えられます。

【新改訳 2017】

エレミヤ書

16:15 ただ『イスラエルの子らを、北の地から、彼らが散らされたすべての地方から上らせた【主】は生きておられる』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。

16:16 見よ。わたしは多くの漁夫を遣わして——【主】のことば——彼らを捕まえさせる。それから、わたしは多くの狩人を遣わして、あらゆる山、あらゆる丘、岩の割れ目から彼らを捕らえさせる。

「多くの漁夫」すなわち「人間をとる漁師」の役目とは「イスラエルの子らを…彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。」ことです。そしてイエシュアこそがイスラエルの主であることを知らせることです。この役目をイエシュアは弟子の中から「シモンとシモンの兄弟アンデレ」だけに任命されました。なぜならイエシュアが「人間をとる漁師にしてあげよう」と言われた時、そこには彼ら二人だけしかいなかった、いやもし他に誰かがいたとしても、イエシュアが「ご覧になった」、目を留められたのはこの「シモンとシモンの兄弟アンデレ」だけであったことがはっきりと記されているからです。ここで「シモン」という名前が二度繰り返され、「人間をとる漁師」にとってこの「シモン」という名前の持つ意味がいかに重要であるかが表されていると考えられます。つまりこの名前の語源である「聞く」という意味の動詞シャーマと、その本来の意味を指し示す創世記 3:8 から、神の歩み、すなわち神の御計画についての声、御言葉を「聞く」者が「人間をとる漁師」とされるということが指し示されていると考えられます。このように「人間をとる漁師」とは、神の御計画についての御言葉をシャーマ「聞く」者のことであると言えます。この「人間をとる漁師」の数が増え、エレミヤが預言したように「多くの漁夫」となるようにと祈ります。

5. 捨てる

1:18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。

シモンとシモンの兄弟アンデレとは「網を『捨てる』」イエシュアとともにハーラフ「歩き」始めました。ここで「捨てる」と訳されているヘブル語はアーザヴ(בִּזְזִי)と言い、創世記 2:24 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

2:21 神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。

2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、人のところに連れて来られた。

2:23 人は言った。「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」

2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。

これはアダムのあばら骨からその妻エバが造られる場面ですが、ここで「男は父と母を『離れ』」と訳されているのが聖書で最初のアーザヴです。使徒パウロはエペソ人への手紙の中でこの御言葉はキリストと教会を指し示した偉大な奥義であると明言しています。

【新改訳 2017】

エペソ人への手紙

5:31 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。

このように、「捨てる」アーザヴとは本来、「キリストと教会」、花婿イエシュアと花嫁なる教会が結ばれることを指し示していることが解ります。ですから網を「捨てて」イエシュアに従った「シモンとシモンの兄弟アンデレ」は「教会」を指し示しており、そして「教会」とは神の「歩み」、神が何を目指し、どこへ行こうとしておられるのか、という神の御計画についての「声、御言葉」を「聞く」者としてイエシュアに目を留められた「シモンの兄弟」すなわち「聞く（シャーマ）兄弟」または姉妹として集められた者たちのことであると言えます。もしその「声、御言葉」を「聞く」ならば、このシモンとアンデレのように、それがたとえたった二人であったとしてもそれはイエシュアが目を留められる「教会」であるということ、イエシュアはここに示しておられるのだと考えられます。すなわち以下に語られている通りです。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

18:20 二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。

ルカの福音書

12:32 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。

私たちの教会がたとえ小さくても恐れることなく、この「シモンとシモンの兄弟アンデレ」に表された、神の御計画についての御言葉を「聞く」教会として、そしてその御計画の流れに従って歩む教会、御父とまったく一つになって歩んでおられるイエシュア、この御方だけについて行く教会として変えられ、また整えられていくようにと、心から祈ります。